

3 三国時代から隋代における変遷

i 三国時代～五胡十六国時代・東晋

a 供膳具・水器（付図4）

飲器 高足杯Ⅰ類は三国時代とする河南・洛陽出土玉器（文献47）がある。北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土ガラス製品（4-X₂）は脚部の破片で詳細不明。馮素沸墓からは角杯状のガラス製品（4-X₉）も出土。注器とするが角杯の一種であろう。

把手付杯Ⅰ類Bは、西晋の287年の浙江・常山出土陶器（文献110）に残るが、稀な例。以後はすたれる。把手付杯Ⅲは、前涼（301～376年）とみる新疆出土木製品（4-S_{c1}）、西晋273年の湖北・老河口出土陶器（文献184）にあるが、類例は乏しい。

新器形は、北燕415年の馮素沸墓出土ガラス器（4-X₁）。丸底風の文が高い杯で、口縁がわずかに反る（以下、筒状杯Ⅱ類）。類例は東晋322年頃の南京・象山M7出土ガラス器（文献314）。これに高足をつけたものが、北魏5世紀後半に入ると登場するようになる。

耳杯は、漢代と異なって、口縁が長軸方向で反るようになる（以下、Ⅲ類）。三国時代晩期の江蘇・南京出土銅器（4-O_{b1}）、西晋晩期の河南・洛陽出土陶器（文献447）、東晋早期の南京出土銅器や瓷器（4-U_{c1}）、東晋367年の南京・象山M8出土瓷器（4-V_{d1}）、東晋中・晩期の江蘇・江寧出土瓷器（文献189）などである。三国時代末の南京出土陶耳杯は、陶盤上に2個置かれ、その1個に陶勺（散蓮華）が入っていた（文献325）。だが、耳杯が舟形に反ることは、盤兼用から、飲酒専用になったことを示そう。

曲長杯は、新疆の壁画（第8図1）でみると、五胡十六国時代の4世紀（前秦・後涼）に出現しているが、出土品は知られていないようである。壁画では両手でもっており、かなり大きいことがわかる。

杯・碗・鉢 杯は、後漢には類例の少なかった浅目の平底杯Ⅲ類が盛行する。ほとんどが瓷器で、代表例をあげる。三国時代249年の安徽・朱然墓例（4-N_{b4}）、西晋288年の安徽・和県例（4-P_{b1}）、294年の江蘇・句容例（4-Q₂）、299年の浙江・奉化例（文献204）、東晋322年頃の南京・象山M7墓例（文献314）、前燕4世紀前半頃の遼寧・朝陽釉陶例（4-T_{b2}）などである。東晋335年頃の湖南・長沙例（文献206）や前燕4世紀前半頃の朝陽出土例（4-T_{b3}）は、体部が直立気味となり、高台がつく（以下、高台付杯Ⅲ類）。東晋早期の南京・富貴山出土銀器（4-U_{c3}）、357年の南京・呂家山出土瓷器（4-V_{b4}）、東晋代の江蘇・揚州出土銅器（4-V_{f5}）、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土鍍金銅器（4-X₅）もほぼ同巧。馮素沸例は、後述するように、鍍金銅製提梁壺と一組で、温めた酒を杯で飲んだと考えている。平底杯Ⅲ類から高台付杯Ⅲ類への変化は、4世紀前半頃といえよう。

東晋357年の南京・呂家山出土瓷器（4-V_{b3}）は、体部が丸味をもつ高めの新器形であるが、高さが口径の半分に達しない（以下、高台付杯Ⅳ類A）。東晋晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（4-W_{a4}）もほぼ同巧。南北朝に盛行することになる。

碗のうち、高台付碗はⅠ・Ⅱ類の系統が存続する。Ⅰ類は、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出

土ガラス器（4-X7）などで、後漢晩期のⅠ類Bに比して浅目となる（以下、Ⅰ類C）。Ⅱ類は、三国時代末頃の南京出土銅器（4-O b3）で、後漢後期のⅡ類Dとほぼ同巧。三国時代末頃の他の南京出土銅器（4-O b4）は口縁が外折する。洗とみているが、他に洗とすべきものが伴出しており、碗Ⅱ類の変種とみる（以下、Ⅱ類E）。東晋早期の広州出土銅器（4-U d6）も同巧。ただし、以後にはつづかない。西晋294年の江蘇・句容出土瓷器（4-Q3）、東晋初の江西・南昌出土瓷器（4-S a5）、335年頃の湖南・長沙出土瓷器（4-U a5）、350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）、357年の南京・呂家山出土瓷器（4-V b6）は、高台付杯Ⅲ類大きくしたもの（以下、高台付碗Ⅲ類）。一方、東晋晩期には、体部が内弯気味で、深目の高台付碗が出現する。既述した杯Ⅳ類と対応するものである（以下、高台付碗Ⅳ類A）。東晋晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（4-W a8）で、南北朝から盛行する。銅器は東晋340年代の南京・興之夫婦墓出土品（4-U b4）。これには外被せの蓋が伴う。

丸底碗は、浅目のⅡ類の系統が東晋晩期頃の南京・富貴山出土瓷器（4-W b6）にある程度。平底碗は、杯Ⅲ類とほぼ同形だが、杯Ⅲ類が口径10cm前後で、これより大きく口径15cm前後のものが各所で伴出していることから碗とする（以下、Ⅲ類）。いずれも瓷器で、代表例をあげる。三国時代238年頃の江西・南昌例（4-N a5）、261年の湖北・鄂州例（文献180）、297年の江蘇・揚州例（文献230）、298年の江蘇・衢県例（文献86）、東晋初の江西・南昌出土例（4-S a4）、東晋早期の南京・富貴山例（文献188）、357年の南京例（文献443）など。以後は高台付碗Ⅲ類に主流が移ることになる。三国時代初の江西・南昌出土銅器（文献108）や西晋晩期と推定する南京出土銅器（文献282）は、平底碗Ⅱ類のようだが、長い銅勺（散蓮華）が入っており、羹あるいは五穀を食したと推定できる。前涼（301～376年）とみる新疆出土木製品（文献441）は平底碗Ⅲ類であり、これには鼓形の木製器台が伴出。

鉢のうち高台付鉢は、後漢晩期に登場するⅡ類Dの系統が、三国時代末の南京出土銅器（4-O b5）、東晋早期頃の江西・南昌出土銅器（4-S a6）にあり、口縁での外反が強めになる（以下、Ⅱ類E）。東晋4世紀前半の江蘇・宜興出土銅器（4-S b7）は口縁が外折する（以下、Ⅱ類F）。蓋を伴う。銅鏡など入れていたが、本来は鉢であったと推測する。平底鉢の主流になるのは、碗Ⅲ類を大きくしたようなもので、丸味をもった体部がほぼ直に立ち上がるのが特徴である（以下、Ⅲ類）。ほとんどが瓷器である。三国時代238年頃の江西・南昌例（4-N a6）、西晋297年の江蘇・揚州例（文献230）、298年の浙江・衢県例（文献86）、東晋早期の南京・富貴山例（4-U c7）などがある。西晋294年の江蘇・句容例（4-Q4）は高台付となる（以下、高台付鉢Ⅲ類）。

西晋晩期には、平底で、体部がやや内弯した小型品が出現する（以下、Ⅳ類）。いずれも瓷器だが、体部に醬斑を施すものがあり、ガラス器の模倣と推測する。西晋316年の広州出土例（文献62）が初現で、東晋初頃の江西・南昌例（4-S a8）、東晋早期の南京・富貴山例（4-U c10）、東晋晩期の江蘇・揚州例（4-W b11）などがある。

丸底鉢の好例はないが、球胴で大口のガラス器がある。東晋早期の南京・富貴山例（4-U c8）と北燕415年の遼寧・馮素沸墓例（4-X10）。南京例は口縁が外反するもの。罐と報告しているが、口径8.5cm、高さ7.8cmと小型であり、特殊な丸底鉢（以下、Ⅳ類A）として扱う。同巧品は、他の南京の東晋早期墓（文献317・454）からも出土している。馮素沸墓例は鉢と報

告。口径9.5cm、高さ8.7cm。口縁が肥厚し、わずかに外反する（以下、Ⅳ類B）。

鉄鉢形・盂 鉄鉢形は後漢中期に登場したⅠ類がつづく。西晋288年の安徽・和県出土銅器（4-Pb5）、294年の江蘇・句容出土瓷器（文献90）、東晋335年頃の湖南・長沙出土瓷器（4-Ua9）、後燕395年の遼寧・朝陽出土陶器（文献523）などである。いずれも蓋は伴わないようである。

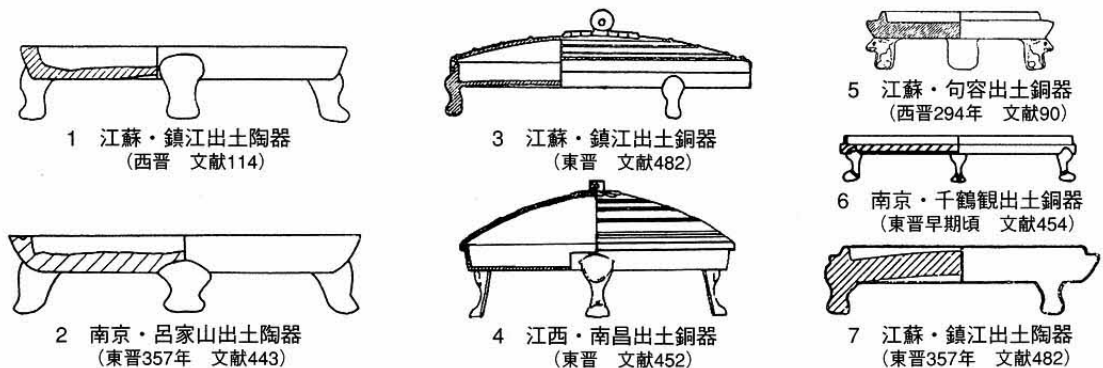
盂は、後漢早期に登場したⅡ類が存続する。西晋299年の江蘇・揚州出土瓷器（文献230）、東晋353年の浙江・黄岩出土瓷器（文献213）などである。265年の南京・幕府山出土陶器（文献479）や西晋285年の南京出土瓷器（文献154）は高台がつく。前者は蓋が伴い、後者はミニチュアながら、なかには瓷勺（散蓮華）が入っていた。

魁 三国時代の例は知らない。五胡十六国時代や東晋には、後漢晩期に登場するⅡ類Bがつづき、Ⅱ類Aも登場する。銅器でみると、Ⅱ類Aは前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例（4-Tb9）、後燕395年の遼寧・朝陽例（文献523）、北燕415年の遼寧・馮素沸墓例（文献316）、Ⅱ類Bは前燕324年の遼寧・錦州例（文献414）である。東晋350年の南京・温嶠墓出土瓷器（4-Va7）や東晋晩期の江蘇・鎮江出土陶器（4-Wa12）はⅡ類Bで、後者には中に陶勺（散蓮華）が入っていた。羹あるいは粥を食したことを推測させる。

盤・托・有脚盤（硯） 漢代のような大盤はなく、中盤や小盤が主となる。中盤のⅡ類は三国時代晩期の江蘇・南京出土銅器（文献461）が最終例。Ⅴ類Aは後漢から盛行し、三国時代以降も主流を占める。代表例をあげると、三国時代晩期の江蘇・南京出土銅器（4-Ob2）、西晋297年の江蘇・揚州出土陶器（文献230）、東晋350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）、東晋晩期頃の江蘇・揚州出土瓷器（4-Wc3）などがある。三国時代晩期の南京出土中盤Ⅴ類Aは、銅耳杯2個を置いた承盤だが、盤の内底に突帯はない。

小盤のⅠ類B種は、257年頃の甘肅・嘉谷関出土銅器（4-Nc1）が最終例。Ⅳ類は三国時代の甘肅・酒泉出土銅器（4-Nd2）が最終例。Ⅴ類は三国時代249年の安徽・朱然墓出土瓷器（4-Nb2）、西晋305年の江蘇・南京出土瓷器（文献462）など。Ⅵ類Aは、東晋初の広東・和平出土瓷器（文献195）、350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）。Ⅴ・Ⅵ類とも南北朝につづく。

托と判明するのは、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土鍍金銅器（4-X5）で、鍍金銅製の高台付杯Ⅲ類が組む。小盤Ⅴ類の内底に低い突線をめぐらせて銅杯高台の承けとしている（以下、托Ⅰ類）。この種の托は、東晋早期の南京・司家山出土瓷小盤Ⅴ類（4-Uc2）、東晋367年の



第19図 西・東晋の有脚盤 1:6

南京・呂家山出土陶小盤V類（4-Vb₂）にある。

前者では盃耳杯1個（4-Uc₁）が実際にのっており、後者では伴出した高台付の盃杯Ⅲ類かⅣ類Aをのせた可能性がある。托の承けが高くなるのは、南北朝からである。

有脚盤は、すでに戦国期にあり、漢代では爐や温酒樽の下盤としても用いられた。東晋の江蘇・鎮江出土銅器（第19図3）や江西・南昌出土銅器（第19図4）は、蓋を伴い、下盤ではない。前者は硯、後者は三足器とする。同巧品で古いのは298年の浙江・衢県出土銅器（文献86）。陶器では、西晋例（第19図1）や東晋357年例（第19図2）があり、ともに硯とする。底が平坦であるのが特徴（以下、Ⅰ類A）。西晋294年の江蘇・句容出土瓷器（第19図5）は口縁に蓋受けの段をつける（以下、Ⅰ類B）。西・東晋には例が多く、東晋早期頃の南京・仙鶴觀出土銅器（第19図6）や晩期頃の江蘇・江寧出土瓷器（文献189）もほぼ同巧。一方、東晋357年の江蘇・鎮江出土瓷器（第19図7）は底が中高となる（以下、Ⅱ類B）。Ⅱ類Bは大方が認めるように硯であろうが、Ⅰ類は、硯と断定するに若干の問題もある。というのは、韓国でⅠ類B系統を食膳具と考えているからである。

銅・洗 銅は浅銅と深銅が存続するが、環耳をもつ例はなくなる。浅銅Ⅰ類は三国時代294年の安徽・朱然墓出土陶器（4-Nb₇）、西晋305年の南京出土陶器（4-Rb₆）などである。深銅は前漢と大差ないⅠ類が、西晋302年頃の河南・洛陽出土陶器（文献211）や北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土銅器（文献316）にある。馮素沸墓例は、釜・甑と一組で、いずれも明器である。漢代では釜・甑・盆が組であったが、この時代には盆が消失し、銅がその機能も果たしたことになる。

洗は、深洗Ⅰ類Aが残るとともに、深洗Ⅰ類BやⅡ類と、浅洗Ⅱ類とが一組として存続する。ともに西晋初頃までは環耳が残るが、以後は消失する。底に双魚文や吉祥句を飾る例も多い。深洗Ⅰ類Aは三国時代294年の安徽・朱然墓出土瓷器（4-Nb₈）、深洗Ⅰ類Bは三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器（4-Ob₇）、Ⅱ類は三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器（4-Oc₉）などである。東晋335年頃の湖南・長沙出土瓷器（4-Ua₁₂）は、Ⅰ類Bに似るが、外縁の外折が弱い（以下、Ⅰ類C）。浅洗Ⅱ類は、銅器の例が多く、上述した三国時代245年の浙江・南陵例（文献117）、三国時代晩期の南京例（4-Ob₆）や湖北・宜昌例（4-Oc₈）、西晋273年の湖北・老河口例（4-Pa₇）、298年の浙江・衢県例（文献86）、東晋早期頃の江西・南昌例（4-Sa₁₀）や南京・富貴山例（4-Uc₁₁）、北燕415年の遼寧・馮素沸例（文献316）などがある。

他に三国時代に入ると、菓子などをいれた果盒と呼んでいる方形や円形の盤状の器が登場してくる。三国時代238年頃の江西・高榮墓出土方形漆器（文献100）、249年の安徽・朱然墓出土円形漆器（文献356）が古い例で、以後、次第に陶・瓷器の出土例が増加する。

b 貯蔵具・注器（付図5）

扁壺・瓶 扁壺は後漢の良好資料がないが、西晋295年の江蘇・呉県出土瓷器（文献475）やこれと同巧の南京出土瓷器（5-Pc₁）は、肩が張って高い高台がつく新器形（以下、Ⅳ類）。297年の江蘇・宜興出土瓷器（文献212）や東晋335年頃の湖南・長沙出土瓷器（5-Ua₁）や350年の南京・温嶠墓出土瓷器（5-Va₁）は方形を呈する新器形（以下、Ⅴ類）。Ⅴ類は中国

南半部の地域色か。以後にはつづかない。

瓶は、前漢晩期以来の長口瓶Ⅰ類が、三国時代初の江西・南昌出土銅器（5-Oa1）や西晋晩期の河南・洛陽出土陶器（5-Rc1）に残るが、以後はすたれる。南北朝以降は反口瓶が主流になる。

壺・細頸壺・提梁壺 細頸壺は、盤口のⅢ類が三国時代238年頃の江西・高栄墓出土瓷器（5-Na1）に残る。やや胴長で肩が張る（以下、Ⅲ類B）前燕4世紀前半の遼寧・朝陽出土陶器（5-Tc1）は、口縁が外反する細頸壺Ⅰ類だが、口縁が肥厚して玉縁状になるのが特徴（以下、Ⅰ類D）。Ⅰ類Dは北魏に存続する。

球胴壺は、前漢の伝統をひくⅡ類Bが、西晋代とみる甘肅・敦煌出土銅器（5-Of3）にあるが、稀な例。三国時代からは、口縁端が立ち上がったいわゆる盤口の球胴壺が出現する（以下、Ⅲ類）。いずれも瓷器で、代表例をあげると、三国時代249年の安徽・朱然墓例（5-Nb2）、三国時代晩期の南京・長崗例（5-Ob2）、西晋288年の安徽・和県例（5-Pb2）、294年の安徽・句容例（5-Q2）、東晋早期の南京・富貴山例（5-Uc2）、東晋晩期の江蘇・鎮江例（5-Wa2）など。まだ口縁の立ち上がりは弱い（以下、Ⅲ類A）。南北朝以降も残る。

長胴壺は、漢代の伝統をひくⅡ類Aが、前燕324年の遼寧・錦州出土陶器（5-Ta2）や同じ頃の遼寧・朝陽出土陶器（文献431）にある。三国時代に入ると、盤口のもものが登場してくる。ほとんどは瓷器であり、代表例をあげる。西晋298年の浙江・衢県例（文献86）、東晋早期の南京・富貴山例（5-Uc3）、372年頃の南京・象山例（5-Vd2）。いずれもやや肩が張るが、胴部の丈がそれ程高くないのが特徴（以下、Ⅲ類A）。南北朝にもつづく。一方、東晋407・416年の南京・司家山例（文献444）、東晋晩期の江蘇・鎮江例（5-Wa3）は、胴部が長くなる（以下、Ⅲ類B）。これも南北朝につづく。

提梁壺は、例が極めて少なく、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土鍍金銅器（5-X1）ぐらいである。球胴の丸底で、口縁が大きく開く新器形である。鍍金銅杯・托と一組で、酒を温めたとみている。

唾壺 後漢晩期に出現した定型的な唾壺Ⅰ類は、三国時代238年頃の江西・南昌高栄墓出土銀器（文献100）、三国時代晩期の南京出土瓷器（5-Ob4）、西晋288年の安徽・和県出土瓷器（5-Pb4）まで残る。西晋294年の江蘇・句容出土瓷器（5-Q4）、299年の浙江・奉化出土瓷器（文献204）は、頸が長めとなるが、まだ口縁端の立ち上がり（盤口）がそれ程高くない（以下、Ⅱ類A）。東晋323年の江蘇・宜興出土瓷器（5-Sb3）は、頸が長目で、しかも口縁端の立ち上がりも高くなる（以下、Ⅱ類B）。以後は、Ⅱ類Bが主となる。Ⅱ類Bの銅器は東晋晩期頃の江蘇・江寧例（5-Ve4）。瓷器は多く、東晋366年の浙江・奉化例（文献204）、東晋早期の南京・富貴山例（5-Uc4）、350年の南京・温嶠例（文献463）、367年の南京・象山例（文献442）、や江蘇・南京例（5-Wb4）などがある。南京・富貴山例には、中央に小孔を穿った漏斗状の落とし蓋が伴う。

罐・瓮 罐は短胴罐Ⅱ・Ⅲ類、長胴罐Ⅱ類などが存続する。すべて瓷器か陶器。短胴罐のうち、肩の張るⅠ類は三国時代晩期頃の南京・長崗例（文献461）や西晋288年の安徽・和県例（文献115）で、以後も残る。球胴のⅡ類は、バラエティがあるが、三国時代249年の安徽・朱然墓例（5-Nb5）、三国時代晩期頃の南京・長崗例（文献461）、西晋293年の湖北・老河口例（5-

P a5)、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例(文献431)などだが、南北朝にはすたれる。下肥れのⅢ類は、三国時代261年の湖北・鄂州例(文献180)や五胡十六国時代末～北魏初の洛陽出土例(文献179)だが、以後は途絶える。他に、三国時代には、鉄鉢形Ⅰ類Aに似て、口縁が強く内弯するが、浅目で短頸のものが出現する。三国時代末頃の南京出土例(5-O d3)で、極めて短い直口の口縁がつき、口縁近くに環状把手をつけるのが特徴(以下、Ⅳ類A)。蓋や高台のつく例が三国時代末にはある(文献108・325)。西晋294年の江蘇・句容例(文献90)、西晋の4世紀初頃と推測する江蘇・宜興例(文献212)は丈がやや高くなる(以下、Ⅳ類B)。302年の安徽出土銅器(5-R a3)や東晋350年の南京・温嶠出土瓷器(5-V a3)は短頸だが、環状把手がない(以下、Ⅳ類C)。Ⅳ類も南北朝にはほぼすたれてしまう。

長胴罐もすべて瓷器か陶器。最大径が胴中位にあるⅡ類は、三国時代249年の安徽・朱然墓例(文献356)、東晋335年頃の湖南・長沙例(文献206)、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例(文献431)、東晋353年の浙江・黄岩例(文献213)、五胡十六国時代末～北魏初の洛陽出土例(文献179)などである。

瓮もすべて瓷器か陶器で、バラエティがある。代表例は、西晋288年の安徽・和県例(5-P a6)、294年の江蘇・句容例(5-Q 5)、東晋335年頃の湖南・長沙例(5-U a6)、東晋晩期の江蘇・鎮江例(文献482)、五胡十六国時代末～北魏初の洛陽例(文献179)など。

大口罐も、瓷器か陶器で、三国時代から東晋までである。

銚壺・水注 銚壺は、Ⅳ類が三国時代249年の安徽・朱然墓出土銅器(5-N b3)、東晋晩期と推定する湖北・漢陽出土銅器(5-V c5)がある程度である。後者は西晋以前とするが、有柄注壺Ⅰ類Aを伴出し、東晋晩期に比定する。水注の好例はない。おそらく注壺に主流が移ったのであろう。

有柄壺・有柄注壺・注壺 中国では、一般に盤口壺の肩に鶏形の注口をつけたものを、天鶏壺あるいは鶏首壺と呼んでいるが、鶏形でないものを含むことから注壺と呼ぶ。肩と口縁を結ぶ、大きな把手をもつのが通例(以下、有柄)。瓶などに注口や把手をつけたものも一括する。ほとんどは瓷器である。これらのうちで、最も古いのは、把手のない注壺。三国時代晩期頃の南京例で、直口の短頸罐に短い注口をつける(以下、Ⅰ類)。注口は、うち1例が鶏形(5-O b5)だが、他が筒状。ともに初現例である。東晋305年の南京例(文献462)、335年頃の湖南・長沙例(文献206)、東晋早期の南京・富貴山例(5-U c5)は、盤口の短胴壺Ⅲ類に短い鶏形注口をつけたもの(以下、Ⅲ類)で、いわゆる鶏首壺系注壺の最終例となる。有柄注壺のうち、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽出土陶器(5-T c4)は、長胴壺Ⅱ類Aの口縁端を片口としたものの(以下、Ⅱ類)の初現例だが、類例は少ない。

有柄注壺はほとんどが瓷器。東晋367年の南京・象山例(5-V d6)が、盤口の短胴壺にやや長目の鶏形注口と把手をつけたもの(以下、Ⅲ類A)の初現例になる。類例は、5世紀初の南京・司家山例(文献444)、東晋晩期の江蘇・江寧例(文献189)や江蘇・鎮江例(5-W a6)。東晋晩期の他の江蘇・鎮江例(5-W a7)は肩の張る初出例(以下、Ⅲ類B)。前凉4世紀前半頃の新彊出土陶器(5-S c5)は、短胴壺に片口と把手をつけた、有柄注壺の初現例。球胴で丈が低い(以下、Ⅳ類A)。この手の有柄注壺は、南北朝から中国本土に及ぶことになる。他に、東晋晩期の江蘇・鎮江出土瓷器(5-W a5)のように、直口壺を片口とした有柄注壺も

ある（以下、Ⅳ類B）。

虎子 虎子は、体部を虎形とし、上に大きな把手をつけた典型例が西晋275年の南京出土瓷器（文献479）にある（以下、Ⅱ類）。東晋初の広東・和平出土瓷器（文献195）、早期の南京・富貴山出土瓷器（第20図5）も同巧。南京・富貴山では虎の体毛を表現する銅器（第20図4）も出土。似た銅器は北燕415年の遼寧・馮素沸墓（文献316）でも出土。後漢に登場する半球状の虎子（第20図1）は、三国時代初の江西・南昌出土瓷器にある（文献100）。上に把手がつくのは新要素である（以下、Ⅰ類B）。西晋306年の福建・松政出土瓷器（文献526）や東晋中・晩期の江蘇・鎮江出土瓷器（第20図2・3）もほぼ同巧。

他に、特殊なものとして、後漢に登場した二重口縁罐が三国時代238年頃の江西・高栄墓出土瓷器（5-Na4）、前漢代から続く倉は三国時代晩期の南京出土瓷器（文献461）、西晋299年の江蘇・揚州出土瓷器（文献230）に残り、以後も細々とつづく。

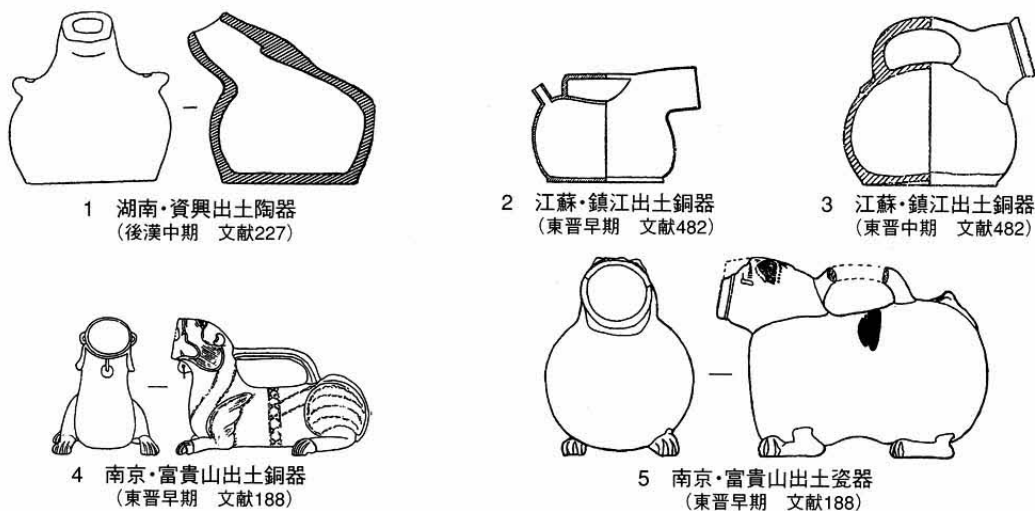
c 煮沸具（付図6）

鍋・三脚鍋・釜 鍋は浅い半球状のⅠ類Dと、口縁下でくびれる深目のⅡ類B・Cがつづく。Ⅰ類Dは、西晋273年の湖北・老河口出土銅器（6-Pa1）。以後は唐代まで出土例がない。Ⅱ類Bは三国時代249年の安徽・朱然墓出土瓷器（6-Nb1）、三国時代晩期の南京・長崗出土陶器（6-Ob2）、東晋初の広東・和平出土銅器（文献195）、Ⅱ類Cは三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器（6-Oc4）。Ⅱ類B・Cは中国南半部の特色で、南北朝にもつづく。

三脚鍋は、後漢晩期に登場したⅡ類が、三国時代の甘肅・酒泉出土銅器（6-Nd3）に残る。三脚鍋の最終例。他の類例があるが、爐である可能性が高い。

釜は、Ⅲ類のみが、三国時代晩期の湖北・宜昌出土銅器（6-Oc3）に残るが、以後は途絶えてしまう。

釜・三脚釜・甑 釜・甑は、副葬品が少なく、しかも明器が主となるため、実態は明瞭ではない。三国時代の甘肅・酒泉出土銅器（6-Nd2）や西晋晩期頃の河南・洛陽出土銅器（6-Rc1）は、球胴釜Ⅱ類B。ともに甑はⅡ類Cのようである。典型的な長胴釜Ⅱ類Bの例は知らないが、南北朝にも存続している。無頸に近いⅢ類は、西晋288年の安徽・和県出土陶器（文献



第20図 後漢～東晋の虎子 1 : 8

115)、北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土銅器(文献316)もほぼ同巧で、これには口縁が外折してのびる銅甗(以下、Ⅲ類)を伴う。馮素沸墓出土銅器(6-X₁)や前燕初3世紀後半の遼寧・北票出土銅器(6-T_{d1})は、やや浅目の長胴釜Ⅲ類に提梁を伴う。中国北辺部の地域色を示す。

三脚釜は前燕324年の遼寧・錦州出土銅器(6-T_{a3})。最終例で、明器。伴出した甗はⅢ類。東晋早期頃の南京・仙鶴觀出土銀器(文献454)は、有蓋鼎Ⅱ類のミニチュア。復古品として、水滴などに利用されたのかもしれない。

鍍 中国北辺部の地域色を示すもの。前燕4世紀前半の遼寧出土銅器(6-T_{b2})は、前漢中期頃のⅡ類より、身が深くなったもの(以下、Ⅳ類)。底に煤が付着。北魏早期の内蒙古出土銅器(文献490)もほぼ同巧。北燕415年の遼寧・馮素沸墓出土銅器(6-X₂)も同巧で、ともに提梁がある。馮素沸墓出土銅器では、後漢晩期からのⅠ類Bも出土している(文献316)。Ⅳ類は以後もつづく。

温酒樽 西晋297年の江蘇・周処墓出土陶器(文献212)が唯一例である。陶勺(散蓮華)を伴う。以後は途絶する。

鑊斗 後漢に出現するⅠ類Aは、三国時代249年の安徽・朱然墓出土陶器(6-N_{b4})が最終例。三国時代晩期頃の南京・長崗出土銅器(6-O_{b5})、3世紀末頃と考える浙江・安吉出土銅器(文献413)や南京出土銅器(6-P_{c2})は、体部がⅠ類Aだが、把手は曲折する龍頭となる(以下、Ⅰ類B)。西晋295年の江蘇・呉県出土銅器(文献475)は、把手が曲折する龍頭だが、体部は口縁が外折する鍋Ⅰ類であるのが特徴(以下、Ⅱ類)で、以後の主流となる。Ⅱ類の類例は、いずれも銅器で、西晋308年の南京例(文献72)、前燕4世紀前半の遼寧・朝陽例(6-T_{b4})、東晋早期の南京・富貴山例(6-U_{a3})などである。北燕415年の遼寧・馮素沸墓例(文献316)や北魏初の山西・大同出土例(文献329)は、口縁が二段になる新器形(以下、Ⅲ類)。ともに口縁と把手の間に補強材を加えたもので、中国北辺部の地域色か(以下、Ⅲ類A)。前燕初とする遼寧・北票出土例(6-T_{d5})も同巧で、4世紀後半～五世紀初になろう。遼寧・朝陽例は底に煤が付着する。大同例は銅勺を伴い、三国時代末頃の南京出土瓷器(文献325)は中に瓷勺が入っていたことから、羹などを煮たり温めたりしたことが知れる。

d 雑器(付図6)

熨斗 いずれも銅器。前漢晩期からつづくⅡ類Aは、三国時代249年の安徽・朱然墓例(6-N_{b6})、三国時代早期の安徽・南陵例(文献117)。西晋293年の湖北・老河口例(文献184)、東晋早期の江西・南昌例(6-S_{a7})や南京・富貴山例(6-U_{c6})、北燕415年の遼寧・馮素沸墓例(文献316)はⅡ類B。後漢中期に登場するⅢ類は、三国時代晩期の南京・長崗例(6-O_{b7})、西晋288年の安徽・和県例(6-P_{b4})。

爐 この時期の円爐は、後漢晩期に登場したⅡ類Aが盛行する。鍋Ⅱ類とは、浅いことから区別できる。環耳のあるものとないものがある。銅器が多く、体部に多数の細突線をめぐらすのが特徴。三国時代238年頃の广西・高榮墓例(文献100)、西晋249年の安徽・朱然墓例(6-N_{b5})、288年の安徽・和県例(6-P_{b3})、東晋初頃の江西・南昌例(6-S_{a6})につづく。鉄器は3世紀末頃と推測する南京例(文献63)や東晋335年頃の湖南・長沙例(6-U_{a5})のよ

うに、体部は素面である（以下、Ⅱ類B）。前者にはなかに炭が残っていた。ほとんどが鏝斗を伴出している。実際に、三国時代末頃の江西・南昌出土瓷器（文献108）や4世紀初頃の江蘇・宜興出土瓷器（文献212）では、爐Ⅱ類のなかに、勺入りの鏝斗を入れており、これらが一組で用いられたことを示している。

燈 豆燈は、Ⅰ類Bが西晋早期の北京出土陶器（文献527）や晩期の洛陽出土陶器（6-Pd7）に残り、Ⅲ類Aが東晋350年の南京・温嶠墓出土瓷器（文献463）に残る。

盞燈は、Ⅰ類の系譜をひく銅器（6-Oes）が西晋早期末頃の敦煌から出土。環状把手は1個である（以下、Ⅰ類B）。同巧の銅器（6-Ub7）は、東晋341・348年の南京・興之夫婦墓から出土。把手は折りたためるようになっている。ともに燈盞とする。Ⅰ類は以後の例を知らないが、連枝燈は北魏524年（文献76）にも存続する。Ⅱ類は西晋晩期の洛陽・谷水出土陶器（6-Pd5・Pd6）まで残る。ここでは燈盞6個に対して、中空柱の燈台は2個。他に台座に穴をあけたものが一個出土。中空柱をもつものを、空心盤と呼んでいるが、中空柱に盞の突起が入ること、両者が近接して出土していることから一組とみた。

なお、蠟燭用の針をもつⅠ類の確実な例は、西晋代の江蘇・徐州出土鉄器（文献528）や五胡十六国時代末～北魏初の洛陽出土鉄器（文献179）であり、遅くとも隋代には蠟燭を燈台の中空柱に差し込むⅡ類に主流が移ったと推定される。ただし、蠟燭用Ⅰ類は、北宋代以降に新たな展開をみせる。

ii. 南北朝時代・隋

a 供膳具・水器（付図7）

飲器 高足杯は新しい器形が各種登場する。Ⅱ～Ⅴ類に分類する。Ⅱ・Ⅲ類は北魏5世紀後半頃の山西・大同出土鍍金銅器（7-Cb1・Cb2・Cb3）。前二者（7-Cb1）は杯身が細目で、体部が大きく反るのが特徴（以下、Ⅱ類）。脚はまだ低いが、底部との境に段があるのも特徴。後者二者（7-Cb1・Cb3）は、杯身がやや浅目で、丸味をもった体部が口縁下でくびれたのち外反するのが特徴（以下、Ⅲ類）。うち1点（7-Cb2）は蠟付けした脚が脱落しているが、他の1点の脚は高目で中程に太目の突帯をもつのが特徴。器面を飾る人物像や文様から、東ローマ帝国あたりで製作されたと推測できる。類例は少ない。Ⅳ類は杯身がやや深目な半球状のもの。南齊5世紀末頃と推測する福建・福州出土瓷器（文献279）は、体部がほぼ直、脚はやや低目で、中程に突帯もない（以下、Ⅳ類A）。北魏504年の大同出土銀器（文献346）は、破碎しているが、Ⅳ類Aの可能性が高い。隋代の河南・安陽出土瓷器（文献224）は、杯身が内弯し、脚は高目で中程に太目の突帯をもつ（以下、Ⅳ類B）。杯身のほぼ全体に多数の小乳を貼り付けているのは、ガラス器の模倣と推測する。Ⅴ類は杯身がやや浅目で、丸味をもった体部が口縁端でわずかに外反するもの。初現は、5世紀後半頃の大同出土鍍金銅器（文献42）にある。その系譜をひくのは、隋592年の陝西・西安出土ガラス器（文献2）や597年の山西・太原出土瓷器（7-Sa1）、隋代の湖南・長沙出土銅器（文献215）。いずれも脚は高目だが、中程に突帯はない（以下、Ⅴ類A）。隋頃の江西・壮族自治区出土銅器（7-V1）は杯の底が平らで、地域色を示す（以下、Ⅴ類D）。隋608年の西安・李静訓墓出土金器（7-Sc1）は、脚

は高く、脚の中程と杯身の口縁寄りに各1本の細い突線をめぐらすのが特徴（以下、V類B）。李静訓墓出土銀器は、脚の中程と、脚と杯身の境に太目の突帯をめぐらすのが特徴（以下、V類C）。V類CかⅢ類が唐代に盛行する高足杯Ⅶ類の祖型と推測する。なお、隋584年の山東・徐敏行基壁画（第10図1）では、主人が高足杯らしきものを片手にもつ。

高足杯には、皿状の杯身に低目の高足がついたものも登場する（以下、盤状高足杯）。高台は小さく、盤とするには不安定であり、杯とみる見解に従う。北魏529年の甘肅・長家川出土銀器（文献322）は、杯身が浅い半球状であるのが特徴。脚は八字状で脚端が折れる。東魏544年の河北・李希宗出土銀器（7-Kd6）は、杯身の体部に流水文、底に蓮華文を打ち出しているのが特徴。

曲長杯は、確実な例がないが、北魏5世紀後半頃の大同出土鍍金銅器（7-Cb5）が小さくて低目の高台がつくもの。高さは4.5cm、長径23.8cm、短径14.5cmと大きい。盤（花形長盤）の可能性もあるが、隋代の壁画（第10図2・3）や既述した4世紀の壁画（第8図1）でみるとかなり大きく、一応杯とみておく。

把手付杯は良好な出土例がないが、劉宋536年の南京・蕭象墓出土陶器（7-Jc1）はⅡ類C。片口がつくようで、小形の注器になるが、この器形が中国南半では残ったと推測される。特異なのは壺型の器に1個の把手をつけた青海・上孫家寨出土鍍金銀器（7-Hd4）。口径7cm、高さ15.8cm。西域のクルド人の絵画資料（文献421）をみると、飲器としていたことがわかる。直口で平底なのが特徴（以下、把手付壺形杯Ⅰ類）。時代は、青海省例の後漢晚期～晋代としているが、伴出した唾壺から6世紀中頃に比定すべきと考える。北周566年・584年の河北・崔昂出土銅器（文献320）は、口縁が外反する平底小形品（以下、把手付壺形杯Ⅱ類）である。類例は少ない。

角杯の出土例は知らないが、北齊のソグド人墓壁画（文献390）をみると、角杯は少なくとも一部では存続していたことが知れる。

耳杯は三国時代晩期に登場したⅢ類が存続する。北魏485年頃の寧夏・固原出土銀器（7-Cc4）や504年の山西・大同出土銀器（文献346）。南朝後期の南京・西善橋墓壁画（第9図5）では、竹林の七賢が耳杯Ⅲ類で酒を飲んでいる。類例は極めて少なく、限られた場での使用になったと推測できる。

杯・碗・鉢 杯は、平底のⅢ類が劉宋426年の福建・政和出土瓷器（7-Bc1）、北魏528年の洛陽元邵墓出土陶器（文献78）や梁527年頃の湖南・邵陽出土瓷器（文献453）などにあるが、例は極めて少ない。燈盞かもしれない。北魏481年の河北・定県石函出土銅器（7-Can6）や南齊496年の江西・青江山出土銅器（7-Db3）は、Ⅲ類に似るが、体部が直立気味。口径10cmほどで、前者は器表に唐草文を飾る丸底（以下、丸底杯Ⅳ類）、後者は器表に多数の沈線をめぐらす平底（以下、平底杯Ⅳ類）。低い高台の付くⅢ類は、南齊496・497年の江西出土瓷器（7-Db1・Ea1）、南齊～梁とみる四川出土瓷器（7-Gb1）、北魏508年の河南・偃師出土陶器（7-Hc1）、北魏516年の河南・偃師出土陶器（文献147）、521年の河北・封氏墓出土ガラス器（文献51）、北周の陝西・咸陽出土ガラス器（文献31）や隋代の湖北・武漢出土瓷器（7-Ua1）にある。咸陽例は器表に切子を飾る。

主流となるのは、東晋に登場した丈の高い高台付杯Ⅳ類Aと、高さが口径の半分かそれをや

や超える高台付杯Ⅳ類Bで、共伴する場合も多い。ともに例が多く代表的なものをあげる。Ⅳ類Aは銅器が、南斉の福建・閩侯例（文献68）などにある。陶・瓷器だと、劉宋435年の広東・新興出土瓷器（7-A b₁・A b₁₂）、462年の福建・政和出土瓷器（7-B b₂）、南斉496年の江西・青江山出土瓷器（7-E c₃）、北魏508年の大同・元淑墓出土滑石製品（7-H b₂）、524年の洛陽出土瓷器（文献391）など。金属器では、梁548年の江蘇・鎮江出土銅器（文献127）、隋608年の西安・李静訓墓出土銀器（文献5）がⅣ類B。河南・洛陽の白馬寺近くで出土した北魏の黒釉陶は、杯Ⅳ類Bで、大小の黄釉斑文を各2列めぐらすことから、ガラス器の倣製とみている（文献25）。他にⅣ類Bは、南斉493年の山東・臨淄瓷器（文献121）、南斉の広西・恭城出土瓷器（7-G a₂）、北魏516年の宣武帝景陵出土釉陶（文献166）、524年の洛陽出土陶器（7-I c₁）、梁532年頃の南京出土陶器（文献346）、536年の南京・蕭象墓出土陶器（7-J c₃）、553年の河北・元良墓出土瓷器（文献182）、隋597年の太原・斛律徽墓出土瓷器（文献399）などがある。劉宋430年の江西・贛県出土銅器（7-A c₄）は鉢とするが、口径約8cmの小型品。口縁に段がつくのは中国では例がない。日本や韓国の例からすると、蓋杯の身か蓋、撮みを欠いたとすれば高台付杯Ⅳ類AかBの蓋。後考をまつ。

一方、6世紀中頃になると、高さが口径に近い例も出現する（以下、Ⅳ類C）。古いのは、553年の河北・元良墓出土瓷器（文献182）で、北斉567年の太原・庫狄業墓出土陶器（7-M c₁）、北周569年の寧夏・李賢墓出土ガラス器（7-N a₂）、576年の咸陽・王德衡出土瓷器（7-O a₁）、隋590年の河南・安陽出土瓷器（文献224）、595年の山西・梅渚夫婦墓出土瓷器（7-R b₁）、607年の安徽・亳県出土瓷器（文献91）、608年の西安・李静訓出土玉器やガラス器（文献5）など。李賢墓例は器表に小円板を飾る。劉宋462年の福建・政和出土銅器（7-B b₃）は、高さが口径の半分程だが、体部がやや内弯気味で直に開くのが特色（以下、Ⅴ類A）。初出例である。類例は、南斉493年の山東・臨淄出土瓷器（7-D a₂）など。北魏516年の宣武帝景陵出土瓷器（7-I a₂）、東魏544年の山東・賈思伯墓出土瓷器（文献514）、北斉後期の山西・太原出土陶器（7-M b₂）は口縁で外反する（以下、Ⅵ類A）。南朝晩期頃と推定する貴州・平坝出土銅器（7-P a₂）は、体部下半に稜があるようである（以下、稜杯Ⅰ類）。稜が下腰にあり、高台も小さく高目なのが特徴。これには宝珠形撮みの笠形蓋と托Ⅲ類が伴う。Ⅴ・Ⅵ類ともに類例はそれ程多くなく、稜杯は貴州例以外知らない。

碗のうち高台付碗は、東晋に登場した浅目のⅠ類Cとやや深目のⅣ類Aが存続する。Ⅰ類Cは劉宋～南斉の福建・政和出土瓷器（7-B c₇）で、以後はすたれる。Ⅳ類Aは盛行。瓷器や陶器で、金属器の例は知らない。代表例をあげると、劉宋435年の広東・新興出土瓷器（7-A a₅）、462年の福建・政和例（文献358）、南斉493年の山東・臨淄出土瓷器（7-D a₄）、497年の江西例（7-E a₇）、南斉とみる福建出土瓷器（7-E c₆）や江西・恭城例（7-G a₆）、北魏516年の宣武帝景陵例（文献166）、524年の洛陽・孟津例（7-I c₆）、東魏537年の河北・高雅夫婦墓例（7-K a₈）、北斉547年の河北・磁県例（文献94）、565年の河北・呉橋例（文献351）、562年の山西・庫狄廻洛墓例（7-M b₄）、北斉後期の山西・太原例（文献384）、隋582年陝西・李和墓出土陶器（文献306）など。南斉の福建例は托Ⅱ類上にのっていた。6世紀の河北・封氏一族墓出土瓷器（文献51）は托か下盤を伴う。北斉562年の山西・庫狄廻洛墓例（7-M b₅）、隋595年山西・汾陽例（7-R b₄）は体部が立って深目となる（以下、Ⅳ類B）。

高台付碗の新器形は、体部が外傾し、口縁でわずかに外反する深目のもの（以下、Ⅵ類）と、輪花形のもの（以下、花碗）とがある。Ⅵ類の初出は劉宋441年の福建・福州出土瓷器で、宝珠形撮をもつ笠形の蓋が伴う（文献481）。劉宋～南齊の福建・政和出土瓷器（7-Bc8）、南齊493年の山東・臨淄出土瓷器（7-Da5）、南齊の湖南・長沙出土陶器（7-Eb8）、隋586年の安徽・合肥出土瓷器（7-Qb5）もほぼ同巧。概して浅目であるのが特徴（以下、Ⅵ類A）。政和例はこの時期としては珍しく擬高台でない。花碗は、南朝晩期～隋とみる広東・遂溪出土銀器（7-Pb3）。高台の小さいのが特徴（以下、花碗Ⅰ類）。それぞれ、唐代に盛行する稜碗や花碗の先行例である。遂溪例は、口縁内面に刻んだ文字から、ササン朝ペルシャ産と知れる。

丸底碗は、深目のⅠ類が北魏524年の洛陽出土陶器（文献391）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）にある。口縁でわずかに反る深目のもの（以下、Ⅲ類）が北魏前半期の山西・大同出土銀器（文献398）にある。高足杯Ⅲ類の杯部と類似し、人物文様も共通する点がある。東ローマ帝国あたりの産であろう。初出例。浅目のⅡ類は隋610年の広東・韶関出土陶器（7-Ta4）だが、稀な例。南北朝からはⅡ類より浅いもの（以下、Ⅳ類）や、体部が外傾して盤に近くなったもの（以下、Ⅴ類）が登場する。Ⅳ類の初現は隋582年の河北・景県出土銅器（7-Qa2）。Ⅴ類は北周の金属器で、明器のため小さい。小盤Ⅵ類Aに似るが、これより深いので碗とした（以下、Ⅴ類A）。569年の寧夏・李賢墓出土銀器（7-Oa3）、576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（文献23）、578年の咸陽・若于雲墓出土銀器（文献23）などで、北齊・北周に限られる。隋608年の西安・李静訓出土銀器（文献5）、610年の広東・韶関出土陶器（文献67）、隋代の広東・封開出土銅器（7-Tc5）は、体部がやや立ち気味となる（以下、Ⅴ類B）。隋代の広西・壮族自治区出土銅器（7-V5）も同巧。封開例はなかに銅匕（匙）が入っていた。隋代の湖南・長沙出土銅器（文献215）も同巧。

平底碗は、三国時代からのⅢ類が北齊550年の河北・茹茹公主墓出土陶器（文献348）、南齊末～梁初の四川・綿陽出土陶器（7-Ga5）や北魏516年の宣武帝景陵出土陶器（7-Ib5）に残る。隋代の江西・壮族自治区出土瓷器（7-V4）は体部が内弯気味に立ち上がった小さな平底（以下、Ⅴ類）。

鉢は、西晋代からの平底鉢Ⅲ類の系統が、南齊末～梁初の四川・綿陽出土陶器（7-Gb7）、北魏516年の宣武帝景陵出土陶器（7-Ia7）、北周576年の咸陽・王德衡出土銅製明器（7-Oa4）、丸底鉢Ⅰ類が隋608年の西安・李静訓出土銀器（文献5）に残る。高台付鉢は、Ⅱ類Dの系譜をひく劉宋435年の広東・新興出土瓷器（7-Aa6）や北魏508年の大同・元淑出土陶器（7-Hb5）がある。後にはつづかない。劉宋462年の福建・政和出土瓷器（7-Bb9）、南齊末～梁初の四川・綿陽出土陶器（文献176）、隋の浙江・衢県出土瓷器（7-Ue3）は、高台付碗Ⅳ類Aを大きくしたもの（以下、Ⅳ類）。高台付鉢の新器形は、610年の寧夏・史射勿墓出土瓷器（7-Ta6）。体部が丸味をもって立ち上がったのち外反する深目のもの（以下、Ⅴ類）。

鉢でも特殊な丸底鉢Ⅳ類Aは、北魏前半期の山西・大同出土ガラス器（文献398）に残る。この器表には切り子を飾る。同じくⅣ類Bは南朝晩期～隋代の広東・遂溪出土鍍金器（7-Pb1）につづく。口径・高さとも8cmで、器表に唐草文などを飾る。伴出した花碗Ⅰ類からみて、これもササン朝ペルシャや西域のものと推測される。

鉄鉢形・盃 鉄鉢形は、後漢中期に出現したⅠ類が存続する。北魏481年の河北・定県石函出

土ガラス器（7-Ca7）。南齊の江西・恭城出土瓷器（7-Ga8）、隋595年の安陽・張君墓出土瓷器（文献57）は深目となる（以下、Ⅱ類）。隋代の甘肅・莫高窟第276窟の僧が手の上にのせるのは、鉄鉢形もⅡ類の小型品かあるいは丸底碗か（第10図7）。

盃は、南北朝になると深目となる（以下、Ⅲ類）。南齊497年の江西出土瓷器（文献112）、同じ頃の福建・閩侯出土瓷器（7-Ec9）。北魏521年の河北・封氏墓出土黒瓷器（文献51）は丈が高いだけでなく口縁の内弯が強くなる（以下、Ⅳ類A）。類例は、隋586年の陝西・西安出土瓷器（7-Qc6）、608年の西安・李静訓出土瓷器（文献5）など。蓋を伴うことが多い。北周570年の太原・婁叡墓出土瓷器（7-Mb5）、隋代の湖北・武漢出土瓷器（文献107）や湖南・長沙出土陶器（7-Ub5）は丈がより高くなったもの（以下、Ⅴ類A）。

舟 楕円形の器で、環状把手をもつⅠ類のミニチュア銀器が隋608年の西安・李静訓墓から出土（文献5）。他の例は知らない。

魁 魁は、後漢晩期からつづくⅡ類A・Bの銅器が北魏でも5世紀前半と推定する遼寧・錦州（7-Cd8・Cd9）から出土。梁536年の南京・蕭象墓出土陶器（7-Jc9）はⅡ類A。以後は一時、魁はすたれたようである。

盤・有脚盤（硯）・眷・托 大盤は多くないが、平板なⅤ類Aが主であり、円案の可能性が高い。大部分が瓷器か陶器だが、東魏544年の河北・李希宗例（文献93）は口径48cmの銅器で、上に銀製盤状高足杯、金鏤斗Ⅳ類A各1点と高台付の瓷杯Ⅳ類B5点をのせていた。陶・瓷器の大盤Ⅴ類Aは、北齊の567年の山西・庫狄業墓（7-Mc10）や同年の山西・韓裔墓（文献321）、隋615年の西安・劉世恭墓（文献210）から出土。北齊553年の河北・元良墓出土瓷器（7-Ma11）や隋603年の河南・安陽出土瓷器（文献224）は高台を伴う初出例（以下、大盤Ⅴ類B）。5世紀前半頃とみる甘肅・靖遠出土銀器（7-Ad10）は、Ⅵ類Aに高台をつけたⅥ類Bの大盤。新種の大盤だが、中華にまでは及んでいないようである。

中盤はⅤ類AとⅥ類Aが存続する。いずれも瓷器か陶器。代表例をみると、Ⅴ類Aは南齊493年の山東・臨淄出土瓷器（7-Da7）。杯や碗が出土しており、その下盤であった可能性がある。Ⅳ類Aは劉宋か南齊とみる福建・政和出土瓷器（7-Bc6）や南齊代とみる江西・恭城出土瓷器（7-Ga4・Ga9）。内面に蓮華文を飾っており、食器であろう。

小盤もⅤ類AとⅥ類Aが存続する。いずれも瓷器か陶器。代表例をみると、Ⅴ類Aは劉宋455年の湖北・武漢出土瓷器（7-Ba4）や462年の福建・政和出土瓷器（7-Bb5）、梁532年頃の南京出土陶器（7-Ja7）など。政和例は中央部が窪み、托として用いられたと推定できる。Ⅵ類Aは南齊497年の江西出土例（7-Ea5）、梁536年の南京・蕭良墓出土瓷器（文献382）、北齊567年の太原・庫狄業墓出土瓷器（7-Mc3）、隋代の広西・壮族自治区出土瓷器（7-V3）など。南北朝に登場する新器形は、Ⅵ類Aに高台がつくⅥ類B。北魏504年頃山西・大同出土鍍金銀器（7-Ha3）が標式。内面の人物像からササン朝ペルシャ壺と推測している。Ⅵ類Bは瓷器が多いが、それらは金属器の影響を受けて出現した可能性が高い。代表例をあげる。初現は劉宋441年頃の広東・曲江出土瓷器（7-Ab3）、梁502年の浙江・瑞安出土瓷器（文献61）、北魏516年の宣武帝景陵出土瓷器（7-Ia4）など。

有脚盤で底が中高のⅡ類Bは、南北朝に入ると陶器や瓷器の例が多く、硯とみるのが通例。三脚のほか五脚もある。北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）は、口縁が

直立するもの（以下、Ⅱ類A）。いずれも明器。硯かは疑問。北周578年の陝西・独孤藏墓及び若干雲墓出土陶器（文献23）は陸・海部を区別し、墨壺もつくる（以下、Ⅲ類）。明らかに硯である。隋代には流滴状の脚を多数つけた硯や圈台に透かしを施した硯（文献215）が登場することになる。

畚は、大盤と混同しているが、口縁端を切り欠いて蓋のかかりとしたもの。古い例は、劉宋441年の福建・福州出土瓷器（文献481）。蓋の有無は不明だが、なかに5個の杯を入れており、五盅盒と呼んでいる。類例は、北魏516年頃の宣武帝景陵出土陶器（7-I a12）、北齊550年の河北・茹茹公主墓出土陶器（7-Nb7）など。

托は、南北朝からは承けの高くなったものが主流を占める。^{註7)}小盤Ⅵ類Bの内面に比較的低い承けをつけたもの（以下、Ⅱ類A）が多い。Ⅱ類Aの古い例は、南齊497年の江西出土瓷器（7-E a2・E a4）や南齊とみる福建・閩侯出土瓷器（7-E c6）。同巧品は、北魏508年の大同・元淑墓出土玉器（7-H b2）。北魏516年の宣武帝景陵出土瓷器（7-I a3）や梁532年頃の南京出土陶器（7-J a4）は承けが托口縁よりやや高くなる初出例（以下、Ⅱ類B）。以上のいくつかには高台付杯Ⅳ類Aなどがのっていた。南朝晩期と推定する貴州・平坝出土銅器（7-p a2）は、口縁が水平に外接する托で、高台もやや高目となる（以下、Ⅲ類）。これには稜杯がのっていた。

なお、盤と杯とを一体につくったものを托と報告している場合があるが、燈の可能性が高いことから除外した。

銅・洗 銅は前漢以来それ程変化しない深銅Ⅰ類が隋608年の西安・李静訓出土銅器（文献5）にある。陶器には深銅Ⅰ類（7-I a10）と浅銅Ⅰ類が若干ある。

洗は、6世紀になると、浅洗Ⅱ類の系譜をひくが、体部外傾気味のものが登場してくる。北魏522・524・532年の洛陽出土陶器（7-I b11、文献78・322・391・415）。同巧の銅器は、日本の奈良国立博物館品（文献50）にあり、いずれも高台はまだ低目である（以下、Ⅲ類A）。奈良国立博物館品には銅水瓶を伴ったらしい。洛陽諸例も陶製の反口瓶Ⅴ類（8-I b1・I c3）、日本でいう王子形水瓶が出土しており、一組であった可能性がある。北齊562年や北周576年の銅器（7-Mb9・O a6）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）、521～589年の河北・封氏一族墓出土銅器（文献51）、隋595年の安陽・張君墓出土瓷器（文献57）はⅢ類Aの系譜をひくが、やや深目で高い高台がつく（以下、Ⅲ類B）。これらの諸例も伴出した銅製の反口瓶Ⅴ類（8-Mb1・O a1）と一組になろう。明器もある。

深洗は、Ⅰ類Cが劉宋435年頃の広東・新興出土銅器（7-A a7）に残る。他に北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）や南朝の貴州・平坝出土銅器（7-P a5）がある。後者も6世紀後半頃になろう。三脚がつくのが特色（以下、Ⅲ類）。爐と似るが、底が平らで、後者には双魚文を飾ることから洗とみる。深洗は南北朝からはすたれ、隋・唐代には途絶する。深洗Ⅲ類は浅洗Ⅲ類と伴出した例はなく、それぞれが単独に用いられたと推測する。

盒・高足香盒・豆 盒は円筒形のもの（以下、Ⅲ類A）が北齊562年の山西・庫狄廻洛墓出土銅器（7-Mb7）にある。陶器や瓷器が6世紀初～隋代まで存続する。扁平なのが主で、化粧用白粉などをいれた粉盒とみる人が多い。丈の高い例（M-I c9）もある。他に鼓形をした盒（以下、Ⅳ類）が隋610年の西安・姬威墓出土瓷器（文献293）にある。同類は595年の河南・張

君墓出土瓷器（文献57）にもある。果盒は方形のものが劉宋424年の山東出土陶器（文献87）、円形のものが梁536年の南京出土瓷器（文献382）まで残る。

高足香盒と呼ぶのは、やや小型の高足杯に蓋を伴うものである。北周の絵画資料（第9図4）でみると、柄香爐を持つ王侯の前後に、これを捧げもつ僧らがいることによる。隋代の莫高窟第278窟壁画（文献44）にも僧が手の上にのせる。出土品は北齊562年の山西・庫狄廻洛墓出土銅器（7-Mb8）や565年の河北・呉橋出土銅器（文献351）。前者は総高10.8cm、口径5.6cm、後者は総高9cm、口径5cm。蓋は山形状で撮みが宝珠形、脚が太いのが特徴である（以下、Ⅱ類）。なお柄香爐は、521～589年頃の河北・封氏一族墓出土銅器（文献51）が初出である。

豆は口径15cm前後の小形豆と、口径30cm前後かそれ以上の大型豆とがある。瓷器か陶器。盤の体部がほぼ直に立ち上がるⅠ類と、内弯気味に立ち上がるⅡ類がある。小形豆Ⅰ類は、南齊493年の山東・臨淄例（7-Da6）、北齊553年の河北・元良墓例（7-Ma6）、573年の山東・崔博墓例（文献228）など。盤は浅いのが特徴（以下、Ⅰ類A）。隋607年の安徽・亳県例（文献91）や隋代の湖南・長沙例（7-Ta7）は、盤は深目が特徴（以下、Ⅰ類B）。小形豆Ⅱ類は隋605～618年の湖北・武漢例（7-Ua4）。隋代の河北・邢窯からは小形豆Ⅰ類BとⅡ類（文献367）が出土。Ⅰ類とⅡ類では用いられ方に幾分の差異があったのか大型豆はⅠ類のみ。Ⅰ類Aは589年の河南・宋君墓例（文献79）、603年の河南・安陽例（文献224）、Ⅰ類Bは隋595年の山西・梅渚夫婦墓例（7-Rb7）など。宋君墓例は瓷杯Ⅳ類Bを8個のせた器台だが、隋584年の山東・徐敏行墓壁画（第10図1）では、椅座する女主人の前に、果物をのせた大型豆を置いている。

b 貯蔵具・注器（付図8）

扁壺・瓶 扁壺は北齊573年の河南・范粹墓出土瓷器（文献308）。前漢晩期に登場するⅡ類に似て下肥れだが丈が高い（以下、Ⅵ類）。隋代の河北・邢窯出土瓷器（8-Uc4）は、西晋代のⅣ類に似るが、肩の張りは弱くなる（以下、Ⅴ類）。唐代になると、中国北辺部のみの出土となる。

瓶は反口瓶が主流を占める。劉宋450年の江西出土瓷器（8-Ac1）や劉宋～南齊の福建・政和出土瓷器（8-Bc1）は、後漢中期のⅠ類の系譜をひこうが、球胴で、口縁端が水平にのびる点が異なる（以下、Ⅱ類）。北魏529年の甘肅・張家川出土銅器（文献322）は前漢中期のⅡ類の系譜をひくが、口縁が広がり端部で水平にのびる。瓷器や陶器は例が多く、古いものは北魏5世紀代の山西・大同例（文献398）や南齊499年の湖南・長沙例（8-Eb1）で、北齊565年の河北・呉橋例（文献351）あたりまで存続する。まだ肩の張りが強くなく、丈もやや低い（以下、Ⅲ類A）。北魏415年の河北・定県石函出土銀器（文献74）は、舍利容器で小型だが、Ⅲ類Aの初現例になろう。北魏522年の洛陽出土陶器（8-Ib2）や北齊550年の河北・茹茹公主墓出土陶器（文献348）は、肩が張り、丈も高くなる初現例（以下、Ⅲ類B）。562年の山西・庫狄廻洛墓出土鍍金銅器（8-Mb3）は口縁を欠くが、反口瓶Ⅲ類Bと推測する。北齊後期の山西・太原出土陶器（文献384）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土ミニチュア銅器（文献320）もほぼ同巧。521～589年頃の河北・封氏一族墓出土ミニチュア銅器（文献51）は、肩が強く張るが短胴で、日本でいう蕉形水瓶にあたる。頸は細長くて口縁端が水平にのび、高

い八字形高台がつくのも特徴（以下、Ⅳ類）。北朝に比定している河北・邢窯出土瓷器（8-Oe1）や隋代の河北・邢窯出土瓷器（8-Uc3）もⅣ類。北魏6世紀初の河南・龍門石窟の古陽洞では菩薩がⅣ類らしきものを手のしている（文献46）。

反口瓶は、日本で王子形水瓶と呼んでいる、長卵形の胴部に細長い頸をもつ新器形が6世紀に登場する。古いのは、北魏522年の洛陽出土陶器（8-Ib1）で、胴部が下肥れでないのが特徴である（以下、Ⅴ類A）。銅器は北齊562年の山西・庫狄廻洛墓例（8-Mb1）や北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓例（文献320）で、前者には宝珠形撮みの笠形合わせ蓋を伴う。蓋の内面には脱落を防いだり、なかの香水を散水するためにも用いられたらしい2枚の長い板がつく。瓷器や陶器の例があり、隋の河北・邢窯出土瓷器（8-Uc1）につづく。下肥れのもの（以下、Ⅴ類B）もほぼ併存する。Ⅴ類Bの銅器は、北魏528年の洛陽・元邵墓例（文献78）、東魏544年の河北・李希宗墓例（文献93）、北周576年の咸陽・王德衡墓例（8-Oa1）、521～589年の河北・封氏墓例（文献51）。王德衡墓例は笠形の栓がつき、元邵墓例や封氏墓例は頸部に突線をタガ状にめぐらす。瓷器や陶器もあり、古いものは北魏524年の洛陽・孟津墓出土陶器（8-Ic3）。

以上のⅤ類は、既述したように浅洗Ⅲ類と伴出し、一組で用いられた可能性が高い。敦煌の莫高窟第276窟の隋代の壁画（第10図6）をみると、菩薩が手にもつ瓶は、笠形蓋を伴う反口瓶Ⅴ類Bのようであり、薬水の入っていたことが知れる。ただし、北齊の山東・臨朐出土画像石（第9図6）には、反口瓶Ⅴ類Aらしきものに花を挿し込んでおり、花瓶としても用いられたことが知れる。北周579年の西安・安伽墓壁画（第9図6）でもⅤ類らしきものに花を挿している。

直口瓶の系譜をひくものは、北齊562年の庫狄廻洛墓出土鍍金銅器（8-Mb2）。口縁がやや外反気味であるのは西晋までの例と異なり、しかも片口状になっている点は特異。注器かもしれないが、日本の藤井有鄰館所蔵銅器（文献50）は口縁に片口と、有孔の双耳をもち、唐代の双耳の例からも、投壺の可能性が高いと考える。

盤口瓶は、ゆるやかに外反した口縁が端部で直に立ち上がるもので、これも新器形。肩が張り、底にむかって急にすぼまるもの（以下、Ⅰ類）と、すぼまりが弱いもの（以下、Ⅱ類）とがある。Ⅰ類は、初現が東魏542年の山東・房悦墓出土瓷器（文献474）で、隋597年の太原・斛律徹墓出土陶器（8-Sa2）につづく。Ⅱ類Aは、初現が東魏544年の河北・李希宗墓出土鍍金銀器（文献93）で、隋592年の西安出土陶器（8-Ra2）につづく。李希宗例は、宝珠形撮みの、内被せの笠形の蓋が伴う。小型品。片口をもつ金製鏃斗Ⅳ類A、銀製盤状高足杯などとともに、円案上に置かれていたもので、中に酒の入っていた可能性を示す。盤口瓶は、細々ながら晩唐や北宋にも残る。

壺・細頸壺・觚 細頸壺は、口縁の外反するⅠ類Aが北魏5世紀代の山西・大同出土陶器（文献398）に残る。北齊565年の河北・呉橋出土銅器（文献351）はⅡ類でも頸の短いもの（以下、Ⅱ類C）。似たものは、隋605年の河北・定県出土銀器（文献411）にある。盤口のⅢ類は、劉宋447年の浙江・黄岩出土瓷器（文献213）や南齊～梁の浙江・瑞安出土瓷器（8-Gc2）で、胴は長目だが、口縁端の立ち上がり弱い（以下、Ⅲ類C）。隋586年の安徽・合肥出土瓷器（8-Qb1）、615年の西安・白鹿原出土瓷器（文献210）は、胴長で、口縁端の立ち上がりもより強くなる（以下、Ⅲ類D）。Ⅲ類は以後途絶える。

細頸壺の新器形は、胴が下肥れになる、いわゆる玉壺春式。初現は、四川・綿陽出土瓷器（8-Ae2）。盤口であるが、まだ頸が太目なのが特徴（以下、Ⅳ類A）。年代は東晋早期とみるが、伴出した有柄注壺はⅢ類B、托はⅡ類Aであり、5世紀後半になろう。^{註8)}ほぼ同形は南齊の広西・恭城出土瓷器（8-Ga1）や北齊562年の太原・庫狄廻洛墓出土釉陶（文献221）。後者はガラス器の模倣とされ、宝珠形撮みの、内被せの笠形蓋が伴う。521～589年頃の河北・封氏一族墓出土銅器（文献51）もほぼ同巧。隋595年の河北・崔大園出土陶器（8-Rc1）は頸が細くなる（以下、Ⅳ類B）。610年の西安・姬威墓出土陶器（8-Tb1）や隋代の河北・邢窯出土瓷器（8-Uc2）もほぼ同巧。

球胴壺は、古調のⅡ類Bが北魏486年頃の寧夏・固原出土銅製明器（8-Cc2）に唯一残るが、以後は途絶える。盤口のⅢ類も残る。南齊～梁の浙江・瑞安出土瓷器（8-Gc3）は、東晋代に比して、口縁の立ち上がりが高くなる（以下、Ⅲ類B）。北齊570年の太原・婁叡墓出土瓷器（文献347）では、口縁の立ち上がりがさらに強くなる（以下、Ⅲ類C）。Ⅲ類は極めて少ない。唐代には球胴壺はすたれる。

長胴壺は、あまり変化しないⅡ類Aが北魏485年頃の寧夏・固原出土陶器（文献20）や同じ頃の山西・大同出土陶器（文献398）、528年の洛陽出土陶器（文献78）、北齊547年の河北・堯趙夫婦墓出土瓷器（8-La5）、隋591年の安陽出土陶器（文献224）などにある。盤口のⅢ類Aは劉宋455年の湖北・武漢出土瓷器（8-Ba2）、南齊の福建出土瓷器（8-Ec2）、北周576年の咸陽・王德衡墓出土瓷器（8-Oa2）などにある。とくに胴長のⅢ類Bは、南齊の江西・恭城出土瓷器（8-Ga4）、北周576年の陝西・独孤蔵墓出土瓷器（8-Ob2）につづく。隋代の湖南・長沙出土瓷器（文献215）は胴だけでなく、頸も長くなる（以下、Ⅲ類C）。Ⅲ類Cは初唐に残る。

觚は、下肥れⅡ類系統のものが、唯一北魏486年頃の寧夏・固原出土銅製明器（8-Cc3）にあるが、以後は途絶える。

唾壺 東晋代に登場したⅡ類Bが6世紀前半まで残る。銅器は北魏6世紀前半と推定する洛陽出土例（8-Jb3）などで、口縁を下に折り曲げた漏斗状の落とし蓋を伴う。瓷器や陶器は多く、劉宋435年の広東・新興出土例（8-Aa3）以降、梁536年の南京・蕭象墓出土例（文献382）に及ぶ。北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（8-Oa3）や隋代の湖北・武漢出土瓷器（8-Ua5）もⅡ類B。梁502年の浙江・瑞安出土瓷器（8-Gd5）は頸の長い例（以下、Ⅱ類C）。6世紀中頃になると盤口の立ち上がりが強くなり、頸も長目となる（以下、Ⅲ類）。梁548年の江蘇・鎮江出土銅器（文献127）、北齊567年の山西・庫狄業墓出土銅器（8-Mb4）、北周566・588年の河北・崔昂夫婦墓出土銅器（文献320）。瓷器では北周578年の陝西・独孤蔵例（8-Ob3）から、隋586年の西安例（8-Qc2）や595年の山西・梅渚夫婦墓例（8-Rb3）に及ぶ。落とし蓋に宝珠形撮みをつけるのが通例となる。

罐・瓮・壺 すべて瓷器か陶器である。罐は短胴罐Ⅰ類が、北魏5世紀の山西・大同例（文献398）、南齊～梁の浙江・瑞安出土例（8-Gc6）にあるが、次第にすたれる。瑞安例は肩に蓮弁をめぐらす初現例でもある。6世紀後半に入ると、やや長目の球胴で、肩に4個の環状把手をもつものが登場する。北周565・583年の陝西・王士良墓出土瓷器（8-Od4）や隋607年の安徽・亳県出土瓷器（文献91）などで、直口になる（以下、Ⅴ類A）。北周578年の陝西・独孤

蔵墓例（文献23）や隋代の湖南・長沙例（文献215）は口縁が盤口のもの（以下、Ⅴ類B）。

長胴罐は、最大径が胴中位あたりにあるⅡ類が南斉の福建・閩侯例（文献99）、隋597年の太原・斛律徹墓例（文献399）などにある。6世紀に入ると、肩に4個の環状把手をつけた長卵形のものが登場する。初現は、東魏538年の山東・崔混王墓例（8-Kb5）。頸は短い直口で、内被せの笠形蓋が伴う（以下、Ⅴ類A）。同類は隋590年の河南・安陽例（8-Sb3）、615年の西安・劉世恭墓例（文献210）、隋代の河北・邺窯出土瓷器（8-Uc7）など。隋605～618年の湖北・武漢出土瓷器（文献107）は盤口（以下、Ⅴ類B）。

瓮は劉宋435年の広東・新興例（文献383）、南斉493年の山東・臨淄例（8-Da5）、北斉553年の太原・賀拔昌墓例（文献472）、隋595年の河北・崔大園墓例（文献198）や610年の西安・姬威墓例（文献293）など。

大口罐は南斉の江西・恭城例（文献98）、梁502年の浙江・瑞安例（文献61）などがある。南北朝晩期～隋の広東・遂溪からは大口の陶器（S-pb3）が出土。これには盤状の蓋（盤Ⅴ類）が伴う。珍しい例である。

壺は北魏481年の河北・定県出土ガラス器（8-Ca1）。寺院の、おそらく塔基壇中の石函内から出土したものである。球胴に小さな口をもつもの（以下、Ⅱ類）。瓶と呼んでいるが、そぐわないので壺とした。北魏529年の甘肅・張家川出土陶器（文献322）、北斉547年の河北・堯趙夫婦墓出土釉陶（8-La4）や隋608年の西安・李静訓墓出土ガラス器（文献5）は、肩の張った長胴に小さな口をもつ（以下、Ⅲ類A）。前者二者は、両肩下に環状把手をもつ。隋592年の西安出土陶器（文献2）は肩の張りが弱い（以下、Ⅲ類B）。隋608年の西安・李静訓墓出土ガラス器（文献5）は、口縁が袋状の特異なもので、体部が下肥れ（以下、Ⅳ類）。

鏤壺 鏤壺は、例が少なく、北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（8-Oa6）、隋608年の西安・李静訓墓出土銅器（文献5）がある程度。ともに明器。王德衡墓例は曲折する柄が高く、先端を龍頭形につくる（以下、Ⅴ類）。類例は610年の湖南・道氏墓出土瓷器（文献337）。李静訓墓例は前漢代のⅠ類の復古品とも思われるものだが、把手が中実で長く、しかも蝶番で折りたたむよう工夫したもの、先端も宝珠形にする（以下、Ⅵ類）。

有柄壺・有柄注壺 有柄壺は、盤口の壺や瓶に長い環状把手をつけたもの。いずれも瓷器か陶器。初現は北魏508年の大同・元淑墓例（文献375）のようで、胴長だがまだ太目（以下、Ⅲ類B）。516年の洛陽・宣武帝景陵例（文献166）は胴が細長くなる（以下、Ⅲ類C）。把手の上端は龍頭につくる。東魏537年の河北・高雅夫婦墓例（8-Ka4）や北斉547年の河北・堯趙夫婦墓例（8-La6）などもほぼ同巧。隋595年の山西・梅渚夫婦墓例（8-Rb4）は体部が長卵形（以下、Ⅲ類D）。隋608年の西安・李静訓墓出土瓷器には有柄壺Ⅲ類Bを2個連結したものも出土している（文献5）。双胴だが、口頸は1個（以下、双柄壺Ⅰ類）。

有柄注壺は盤口のⅢ類が盛行する。いずれも瓷器か陶器、東晋晩期に登場したⅢ類Bは、劉宋435年の広東・新興例（8-Aa4）や447年の浙江・黄岩例（8-Af4）に残る。後者は把手の上端を龍頭につくる。南斉493年の山東・臨淄例（8-Ia4）は胴長となる（以下、Ⅲ類C）。同巧品は北魏516年の河南・宣武帝景陵例（8-Ia6）、北斉567年の太原・庫狄業墓例（文献471）、北斉570年の太原・婁叡墓例（文献347）、隋605～618年の湖北・武漢例（8-Ua6）などがある。

片口をもつ有柄注壺は北周567年の寧夏・李賢夫婦墓出土鍍金銀器（8-Na5）。胴は下肥れだが瘦身で、脚は高く中程に太い突帯をめぐらすのが特徴（以下、Ⅳ類C）。ワイン用だろう。器表を飾る人物像などからササン朝ペルシャ産とみている。Ⅳ類は唐代に入ると盛行する。

以上の他に特殊なものとして、二重口縁罐が、南齊頃の江西・恭城出土瓷器（文献98）、倉が北魏532年の洛陽・孟津出土陶器（文献415）、北齊553年の山西・賀拔昌墓出土陶器（文献472）、隋610年の西安・姬威墓出土陶器（文献293）や615年の西安・劉世恭墓出土陶器（文献210）に残る。

c 煮沸具（付図8）

鍋 鍋は、口縁下がくびれるⅡ類Bが南朝中・晩期の江西出土瓷器（文献165）、これに環状把手をつけたⅡ類Cが南朝中・晩期の貴州・平坝出土銅器（8-Pa4）、そして口縁端に方形把手をつけたⅢ類Bが南齊～梁間の四川・綿陽出土銅器（8-Gb7）にある。いずれも中国南半部での地域色を示す。Ⅲ類は唐代になると新たな展開をみせる。

釜・甑・鍑 釜・甑は若干の明器がある程度で、実態が不明。北魏486年頃の寧夏・固原出土銅器（8-Cc5）も明器で、銅甕に釜・甑を置く。釜は球胴釜Ⅱ類のようで、甑はⅡ類D。北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅製明器（8-Oa4）は球胴釜Ⅱ類B。甑は底に大孔1個を穿ったもの（以下、Ⅴ類）。529年の甘肅・張家川出土銅器（文献322）も明器で、ほぼ同巧。

鍑は中国北辺部の地域色。前・北燕からのⅣ類は、北魏5世紀末とみる山西・大同出土銅器（8-Ce4）や北魏晩期とみる内蒙古出土金属器（文献490）に残る。北齊567年の太原・庫狄業墓出土銅器（8-Mc7）や北周569年の寧夏・李賢夫婦墓出土銅器（8-Oa5）は、後漢代のⅢ類の系譜をひくが、提梁のもあり、高台もやや大きくなる（以下、Ⅴ類）。北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅器（文献23）は、高台にかえて三脚を付す特異例。鍑は、隋代の例は知らないが、唐代の提梁罐につながるようである。

鍬斗 鍬斗は銅器が多い。西晋代からのⅡ類は、北魏5世紀前半頃の遼寧・錦州例（文献139）、北燕からのⅢ類Aは北魏485年頃とみる寧夏・固原例（8-Cc6）に残る。北周578・582年の武帝孝陵例（8-Occ5）は、以前の例と異なって、把手の基部を口縁に接してつけたもの（以下、Ⅲ類B）。鍬斗の主流となるのは、口縁に片口を、把手と直角につけたもので、口縁が二段、把手は中実の長いもので、基部近くで曲折、頭部を宝珠形につくるのが基本（以下、Ⅳ類A）。初現は、劉宋431年の江西・大余出土例（文献135）のようである。図示できるのは南齊～梁間の四川・綿陽例（8-Gb8）や南朝中・晩期頃の貴州平坝出土器（8-Pa5）だが、隋608年の西安・李静訓墓例（文献5）まで各時代の銅器がある。なお、北魏486年頃の寧夏・固原出土銅器（8-Cc7）は、把手の基部と口縁の間に補強材をいれたもの（以下、Ⅳ類B）。Ⅱ類Bと共通し、中国北半部の地域色を示す。

片口をもつ鍬斗Ⅳ類の盛行は、鍬斗Ⅱ・Ⅲ類と鍬壺の衰退と表裏をなし、鍋と注器の機能を兼ね備えた工夫と考えられよう。

d 雑器（付図8）

熨斗 熨斗はいずれも銅器である。北魏479年銘の銅器（文献41）は、蝶番で透かし彫りのあ

る蓋をつけ、しかも把手を差し込んで固定するスタンドが伴う初出例である。把手からすると、古式のⅠ類のようである。だが、類例に乏しい。北周569年の寧夏・李賢夫婦墓例（8-Na7）や565・583年の西安・王士良夫婦墓例（8-Od6）は、把手の頭を宝珠形につくるのが特徴（以下、Ⅳ類）。

爐 北周576年の咸陽・王德衡墓出土銅製明器（8-Oa7）は、Ⅱ類Aに近いが平底である。五脚で、五個の環耳がつくのも新しい特徴である（以下、Ⅲ類A）。隋595年の安陽・張君墓出土瓷器（文献57）も、この系統をひくが、三脚で三環耳である（以下、Ⅲ類B）。他方、南北朝に入ると、口径が10～20cmと比較的小型で、深目のものが登場する。碗状を呈するもの（以下、Ⅳ類A）、体部がほぼ直立するもの（以下、Ⅳ類B）、鼎を模したもの（以下、Ⅴ類）などがある。多くは瓷器。下盤を伴うのが基本で、爐と下盤を共造りにしたものもある。Ⅳ類Aの初出は、劉宋435年の広東・新興例（8-Aa5・Aa6）で、幾分か変化しながら隋代の湖南・長沙例（8-Ub8）に及ぶ。Ⅳ類Bは梁～南齊の福建・政和例（8-Bc7）や南齊の広西・恭城例（8-Ca9）。Ⅴ類は、隋608年の西安・李静訓出土銀器（文献5）だが、瓷器は北齊550年の河北・茹茹公主墓例（文献348）が古く、隋595年の河南・張君墓例（文献57）もある。Ⅲ類Aは日本の正倉院の白石製火舎につながる。Ⅳ・Ⅴ類も薫爐として用いられた可能性がある。

燈 豆燈はⅠ類の系統が、5世紀前半の遼寧・錦州出土銅器（8-Cd8）にあるが、脚下半を雁足につくる点は漢の復古か（以下、Ⅰ類C）。Ⅰ類は以後途絶える。Ⅲ類Aの系譜をひくものが、北魏524年の洛陽・孟津出土陶器（8-Ic8）にある。油皿は深く杯状になる。脚が細く、下盤も平板である（以下、Ⅲ類B）。東魏537年の河北・高雅夫婦墓出土銅器（8-Ka6）はⅢ類Bの脚を低くしたもの（以下、Ⅲ類C）。劉宋～南齊の福建・政和出土瓷器（8-Bc8）も脚が低く、杯状となる。南朝ではこの種の瓷燈が多い。北齊570年の山西・婁叡墓出土瓷器（8-Nb8）は、高足杯と下盤とを共造りにしたようなもの（以下、Ⅲ類D）。北魏516年の河南・偃師出土瓷器（文献147）は、蓋燈Ⅳ類と共通し、この蓋と台とも共造りにしたようである（以下、Ⅳ類）。隋代の湖南・長沙出土瓷器（8-Ub9）はⅣ類を低くし、脚中央に太い突帯をめぐらした新形式（以下、Ⅴ類A）。Ⅴ類は唐代に盛行する。

蓋燈は、低目の新器形が登場する。北齊562年の山西・庫狄廻洛墓出土銅器（8-Mb3）。高台の高い燈台に、体部が丸味をもつやや深目の蓋燈をおく（以下、Ⅲ類A）。出土時には銅瓶を燈蓋上においていた。隋595年の山西・梅渚夫婦墓出土瓷器（8-Rb5）は、燈台の中空柱が高くなったもの（以下、Ⅲ類B）。伴出した他の1例は、丈の特に高いもので、中空柱に蠟燭を差し込んだと推定されている蓋（以下、蠟燭燈Ⅱ）と、燈台とを別造りにしたもの。586年の西安出土瓷器（8-Qc6）もほぼ同巧。蠟燭を立てている瓷器は、隋595年の河南・張盛墓（文献57）から出土している。燈台の中空柱が高いⅣ類の系譜をひくものは、燈蓋が半球状の杯形になる（以下、Ⅳ類）。古いのは北魏522年の洛陽出土瓷器（8-Ib7）で、528年の洛陽・元邵墓出土瓷器（文献78）もほぼ同巧。北齊570年の山西・婁叡墓出土瓷器（文献347）は蓮弁などを飾るもの。北齊567年の山西・庫狄業墓出土瓷器（文献471）も高いものだが、燈蓋は体部が外傾して反る新器形（以下、Ⅴ類）。

なお、隋586年の安徽・合肥墓出土瓷器（文献89）は、杯Ⅳ類Aだが、壁龕に置き、単独で燈蓋として使用していたことが明かである。